

イソトピーと詩的機能

著者	後藤 尚人
雑誌名	仏語仏文学
巻	15
ページ	253-267
発行年	1986-02-28
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017481

イゾトピーと詩的機能

後 藤 尚 人

「イゾトピー」(isotopie)が記号論的文学理論の基本用語のひとつであることは言うまでもない。『構造意味論』*Sémantique structurale* (1966)においてA.J.グレマスが提唱して以来、この概念は言語学のみならず、レトリックや詩的テキストの分析などを通し次第に拡大解釈され、今日ではU.エーコーも言うように《an umbrella term》⁽¹⁾として機能するに至っている。

もともと「イゾトピー」は文学言語にのみ特有の性質ではないが、文学言語と非文学言語のそれぞれに働く「冗長性」(redondance)を対比させることによってそこに何らかの弁別特徴が見い出せるのであれば、この着想は「文学性」(literaturnost')⁽²⁾の *criterium* として役立つはずである。

ここ数年來の現象をみれば、「イゾトピー」分析は文学的ディスコースに対し有効的操作であるかのように思われる。ここでわれわれはこの理論の展開を整理しつつ、R.ヤコブソンの「詩的機能」(poetic fonction)との関連から次の問題にふれてみたいと思う。

「イゾトピー」は「文学性」の解明にどのような成果をもたらしたのだろうか。

☆ ☆ ☆

(1) Umberto Eco: 《Isotopy》 in *Semiotics and the Philosophy of Language*, Macmillan Press, 1984, pp. 190 and 201.

(2) Cf. Roman Jakobson: *Questions de poétique*, coll. "Poétique", Seuil, 2^eéd. 1973, pp. 15 et 486.

1. イソトピー

グレマス理論において意味の最少単位である SÉMÈME⁽³⁾ は、(1)そのポジティヴな内容を表わし、意味論の最少単位である SÈME⁽³⁾ の HYPO-TAXIQUE⁽⁴⁾ (異質被包摂的) な関係で記述できる NOYAU SÉMI-QUE [Ns] と、(2)他の語彙素 (lexème) への変換可能性としてそのネガティヴな内容を表わし、他の sémème とコンテキストを形成する SÈME CONTEXTUEL [=Cs], とに分解できる。

「イソトピー」が関係するのはこのCsである。たとえば

Le chien aboie.

という séquence (要素連続) において、まず《aboie》を中心にみると、この動詞は 1) chien, renard, chacal など / animal / という sème を持った主語と、2) homme, Diogène, ambitieux など / humain / という

- (3) 音の最少単位である「音素」(phonème) を構成するのが《phème》であるように、グレマス理論において「語彙素」(lexème) として表出される前の段階にある意味の最少単位は《sémème》であり、その《sémème》を構成するのが《sème》になるため、あえて試訳すれば、《sémème》は「形態意味素」と言うよりは「意味素」であり、《sème》は「意味素」と言うよりは「意味構成素」となろう。Cf. Algirdas Julien Greimas: *Sémantique structurale* [S.S.], coll. "Langue et langage", Larousse, 1966, p. 30 ss. 尚、意味論に関する用語はB.ポティエからの借用が多い。詳しくはA.J. Greimas et Joseph Courtés: *Sémiotique-Dictionnaire raisonné de la théorie du langage* [S.D.], coll. "Langue, Linguistique, Communication", Hachette, 1979 を参照されたい。
- (4) グレマスが「構造」(structure) の関係を説明する際に設けた分類法のひとつ。彼によれば、《sème》と《catégorie sémique》の関係が「部分」と「全体」の関係であるように、「構造」には《disjonction》/《conjonction》以外に、[A] 同じカテゴリー内で、1) 部分から全体をみた関係である HYPONYMIQUE (同質被包摂的)、2) 全体から部分をみた関係である HYPERONYMIQUE (同質包摂的)、また、[B] 同じカテゴリーには属さず、3) 部分から全体の関係とみなされる HYPOTAXIQUE (異質被包摂的)、4) 全体から部分への関係とみなされる HYPEROTAXIQUE (異質包摂的)、という4種の関係が加えられる。Cf. S.S. p. 29 et pp. 35-36.

sème を持った主語のいずれをもとることができ、それぞれの aboie の sémème を記述すれば (Ns は考察しない),

$$1) \text{ Sm1} = \text{Ns1} + \text{Cs1} (\text{cri animal})$$

$$2) \text{ Sm2} = \text{Ns1} + \text{Cs2} (\text{cri humain})$$

となる。

次に《chien》を中心に考えれば、これは 3) aboie, gronde, mord という / animal / を持った動詞と結びつき、また 4) //sorte de grappin⁽⁵⁾ //, //outil de tonnelier// など / objet / を表わす「意味効果」(effet de sens) として解されるので、それぞれの sémème は、

$$3) \text{ Sm3} = \text{Ns2} + \text{Cs1} (\text{animal})$$

$$4) \text{ Sm4} = \text{Ns2} + \text{Cs3} (\text{objet})$$

となる。

さらに lexème 《aboie》をL1, lexème 《chien》をL2 とすると、

$$\text{L1} = \text{N1} + \text{C} (\text{s1} / \text{s2})$$

$$\text{L2} = \text{N2} + \text{C} (\text{s1} / \text{s3})$$

となり、Cs1 が共通するため全体の séquence (Sq) は、

$$\text{Sq} = (\text{N2} + \text{N1}) \text{Cs1}$$

と表記できる。

Cs は Ns が表出する語彙素より広い伝達単位に対応することになり、その機能をより明確にするため CLASSEME と呼ばれ、このような共通する Cs すなわち Classème(s) を持つときメッセージは ISOTOPE と言える。この概念が ISOTOPIE⁽⁶⁾ である。

《Le chien aboie.》などのようなメッセージではイゾトピーは単一的であるが、明らかに複数のイゾトピーが存在する表現もある。

《Le chien aboie.》には上記のとおり / animal / , 《Le commissaire

(5) //.....// は sémème を表わす。

(6) Cf. Greimas: S.S. p. 53.

aboie.》には / humain / という classème がイゾトピーを形成しているが、

Le chien du commissaire aboie.

となると、chien は / animal / か 《chien de commissaire》⁽⁷⁾ としての / humain / かは判別できず、aboie も両方の classème を持つことから、コンテキストによって限定されない限りここではふたつのイゾトピーが同じ強度で働いていると言える、このように同一メッセージ内において複数の PLANS ISOTOPES の存在が確認される場合、「イゾトピー」は ISOTOPIE COMPLEXE と呼ばれる。

イゾトピーが単一である場合、そのメッセージは受け入れやすく、意味は一義的であり、論説文に代表されるような修辞の「ゼロ・レベル」⁽⁸⁾ を目指す《学術的》ディスクールに多くこの現象が見うけられるであろうことは安易に推測できる。ならば《学術的》ディスクールと対極的にとらえられる《文学的》ディスクールには、単一というよりは isotopie complexe の方が支配的だと言えそうである。この観点から、文芸記号論において「イゾトピー」がどのように扱われ展開してきたかを次に追ってみたい。

2. イゾトピーの展開

『構造意味論』と同じ年に発表された論文「神話解釈理論の原理」の中で、グレマスは「イゾトピー」を《un ensemble redondant de catégories sémantiques qui rend possible la lecture uniforme du récit》⁽⁹⁾ と規定し、「物語」(récit) の解読に関するイゾトピーの役割を明確にしてい

(7) Secrétaire du commissaire de police, cf. *Logos*.

(8) Cf. Groupe μ : *Rhétorique générale* [R.G.], coll. "Langue et langage", Larousse, 1970, p. 35 ss.

(9) Greimas: 《Éléments pour une théorie de l'interprétation du récit mythique》 in *Communications N°8*, Seuil, 1966, p. 30, repris dans *Du Sens*, Seuil, 1970, p. 188.

る。ここで《la lecture uniforme》を保証するものが単一的イゾトピーであるとは断定し得ないが、たとえそれが複数的でないにせよ、「物語」は《学術的》と言うよりも《文学的》ディスクールに近いことに変わりはない。また一方で、ボードレールの詩行を分析した際に、¹⁰⁾ グレマスはそこにはっきりと *isotopie complexe* を見出していたことから、*isotopie complexe* 優勢の問題はさておき、単一的であれ複数的であれ、《文学的》ディスクールに対しグレマスが常にイゾトピーの存在を疑わなかったことは明らかである。テキストが読めるためには「イゾトピー」が必要だったのである。

ところで語義変換を生む「転義法」(trope) は、本来「ゼロ・レベル」における語彙コードを犯すことで成り立っている。たとえば《[...] Les soleils mouillés / de ces ciels brouillés [...]》(Baudelaire) においては、通常「液体」とは関連性を持たない《soleils》が《mouillés》と結びつけられ(しかも複数形に置かれ)ている。このような場合、隠喩(métaphore)の効果が強い程、「ゼロ・レベル」でのイゾトピーは破壊されていると言える。

こうした観点から、グループ μ は逸早く「イゾトピー」に注目し、『一般修辞学』*Rhétorique générale* (1970) において《[...] le message littéraire (ou fonction rhétorique) [...] se fonde délibérément sur la non-isotopie.》¹¹⁾ と宣言した。彼らによれば、「隠喩」は語彙コード及びイゾトピーの規則を同時に犯すものであるし、また、語彙コードは守られているものの、non-isotopie から成る文彩 (figure) も考えられ、その代表は「異義複用法」(antanaclase)¹²⁾ になるという。

(10) Greimas: S.S. pp. 97-98.

(11) Groupe μ : R.G. pp. 37-38.

(12) Antanaclase: 《La répétition d'un même mot pris en différents (sic.) sens, propres ou censés tels; ou encore, Le rapprochement de deux mots homonymes et univoques avec des significations toutes différentes.》(Pierre Fontanier: *Les figures du discours*, coll. "Champs", Flammarion, 1977, p. 348.)

その例として、彼らはパスカルの

Le cœur a ses raisons que la raison ne connaît pas.

をあげている、ここでは前者の《raisons》(理由)と後者の《raison》(理性)は《意味》が異なり、両者の間にはイゾトピーが働かず、non-isotopie となっていると彼らは指摘する。このことはグレマスのイゾトピー肯定説への異議申し立てのように思われる。しかしながら、いかなる修辭的操作であれ、それが文彩として成立する以上、そこには「ゼロ・レベル」ではないにしろ、なんらかの次元でイゾトピーが存在するはずである。このリエージュのグループは「イゾトピー」を「ゼロ・レベル」の中でのみとらえていたが(《Il suffit simplement de considérer la règle d'isotopie, étudiée par Greimas, et qui régit l'usage normal du langage, c'est-à-dire le degré zéro.》¹³)、それ以外に、また共通する classème の働き以外にも「イゾトピー」を考えることはできる。上例の「異義複用法」において、それはまさに「表現」のイゾトピーとして機能しているのである。

「意味内容」レベルのイゾトピーを「表現」レベルにまで拡張した¹⁴のはF.ラスチエであった。彼は「イゾトピーの分類法」(1972)において、「イゾトピー」に柔軟性を与え、それを《toute itération d'une unité

(13) Groupe μ : R.G. p. 121.

(14) そもそもグレマスに「イゾトピー」の概念を着想させたのは、イエルクスレウが形態論的範疇の冗長性 (redondance des catégories morphologiques) として考えていた「制辞法」(rection)であった (cf. Greimas: S.S. pp 69-70; Louis Hjelmslev: 《La notion de rection》 in *Essais linguistiques* (1959), coll. "Arguments", Minuit, 1971, pp. 148-160, and also *Prolegomena to a Theory of Language* (1943), translated by Francis J. Whitfield, U. of Wisconsin Press, 1969, pp. 27-28)。したがってイゾトピーの「表現」レベルへの拡張は、同時にその根源への回帰でもあり、その意味においては妥当な「発展」である。

linguistique》¹⁵と定義し、5種類の下位区分を設けている。

その綿密な分類法によれば、「イゾトピー」は、1) グレマスが提唱した本来の用法である ISOTOPIE CLASSÉMATIQUE, 2) グレマス理論の《niveau sémiologique》¹⁶に働く ISOTOPIE SÉMIOLOGIQUE, 3) *sémème* レベルにあらわれる ISOTOPIE SÉMANTIQUE¹⁷, 4) テキストの「調子」(ton)に対応する ISOTOPIE LEXICALE, 5) 統辞レベルでの ISOTOPIE SYNTAXIQUE, の各観点から考察可能とされる。実際、彼はそれぞれの区分について、何らかの分析例をあげており、その中でもマラルメの《Salut》を扱った isotopies sémiologiques の解説は注目に値する。

ラスチエはこの詩を分析するに際し、isotopie sémiologique をさらに三つに分けて考察した。それらは、A) 他の *sémème* の figure nucléaire¹⁸に共通な *sème* を含むことで成り立つ ISOTOPIE SÉMÉMIQUE ou HORIZONTALE, B) 何らかの *sémème* の場へ、ある *sémème* をスライドさせる *sèmes* が、他の *sèmes nucléaires* の周囲に位置することで形成される ISOTOPIE MÉTAPHORIQUE ou VERTICALE, C) それらの結合から生まれる ISOTOPIE VERTICALE et HORIZONTALE であり、A) には《banquet》と《navigation》が、C) には《écriture》の

(15) François Rastier: 《Systématique des isotopies》 in *Essais de sémiotique poétique* (Greimas éd.), coll. "L", Larouss, 1972, p. 82.

(16) グレマス理論において、Ns は唯一の *sème* に還元され得るものではなく、いくつかの *sèmes* の階層関係を持った配列であって、記述すれば $Ns = s_1 \rightarrow s_2 \dots$ となる。これが FIGURE NUCLÉAIRE である。そして、それを構成する *sèmes* は特殊な性質の意味体系へ向けられており、その全体が意味世界 (univers signifiant) の NIVEAU SÉMIOLOGIQUE を形成している。cf. Greimas: S.S. pp. 46-50.

(17) グレマス理論において NIVEAU SÉMANTIQUE を形成するのは *classèmes* であり *sémèmes* ではないのでこのラスチエの用法には注意を要する。

各イゾトピーが見出せるとしている。

このような記号論的操作に拠らずとも、《Salut》のテーマが「祝宴」や「航海」であることはすでに知られているが、このラスチエの分析によってさらにもうひとつ「エクリチュール」という第三の主題が明らかになり、さらにそのイゾトピーを構成する *sèmes* は前者二項のものより数の上で勝っていることが検証されたのである。彼の詳細な解説による限り、詩的テキストにおけるイゾトピーの重層性は疑いのないように思われる。しかしその分析過程の複雑さは、この方法の応用面での成果を必ずしも稔り豊かなものにはしていない。

「表現」レベルにまでイゾトピー理論を発展させはしたものの、ラスチエの関心はどちらかと言えば「意味内容」レベルでの細かな分析に傾けられていた。それに対し、表現／内容という二項対立の観点から「表現」面でのイゾトピーに注目し、《文学的》ディスクールとイゾトピーとの関連を明確に表明したのはM.アリヴェであった。

『ジャリのランガージュ』 *Les Langages de Jarry* (1972) において、アリヴェはグレマスの *catégorie classématique* を PHONÉMATIQUE et / ou GRAPHÉMATIQUE 構造の型に移し、言語遊戯的表現の散在するA.ジャリのテキストから、第二のイゾトピーを指摘した¹¹⁸。彼の「イゾトピー」への関心は翌1973年に論文「多重イゾトピー的テキスト理論のために」となり、「イゾトピー」を《la redondance d'unités linguistiques, manifestes ou non, du plan de l'expression ou du plan du contenu.》¹¹⁹と定義し、ラスチエによって細分化され過ぎたイゾトピーの領域を二分法にもどす。グレマス直系の理論家ではないアリヴェ

(118) Michel Arrivé: *Les Langages de Jarry - Essai de sémiotique littéraire*, coll. "Thèses et travaux", Klincksieck, 1972, p. 79.

(119) M. Arrivé: 《Pour une théorie des textes poly-isotopiques》 in *Langages* N° 31, Didier / Larousse, 1973, p. 54.

にしてみればラスチエの分類はあまりにも複雑であり自説に取り入れがたかったのであろうが、この二分法はいささか楽天的である。ただ彼が「内容」及び「表現」の面にそれぞれイゾトピーが少なくともひとつ以上あるテキスト、また「内容」面に複数のイゾトピーが存在するようなテキストを POLY-ISOTOPIQUE と呼び、《詩的》なテキストは、必ずしも poly-isotopique ではないにしても、少なくとも BI-ISOTOPIQUE だと主張した²⁰ 点は再考に値する。

文学におけるイゾトピーの破壊を表明していたグループ μ は、アリヴェの影響を受け、以後「イゾトピー」を彼らの理論の骨子とし、「詩の解釈と多様なイゾトピー」(1974)において、『一般修辞学』で確立された「変換法」(métabole)の四部門に対応するイゾトピーを提出する。すなわち 1) 語(及びそれ以下)のレベルで「表現」にかかわる「語形変換」(Métaplasme)には ISOPLASMIE が、2) 語(及びそれ以下)のレベルで「内容」にかかわる「語義変換」(Métasémème)には ISOSEMIE が、3) 文(及びそれ以上)のレベルで「表現」にかかわる「構成変換」(Métataxe)には ISOTAXIE が、そして 4) 文(及びそれ以上)のレベルで「内容」にかかわる「論理変換」(Métalogisme)には ISOLOGIE があてられ、また《non-isotopie》は ALLOTOPIE と呼び直されたのであった²¹。

彼らの「イゾトピー」理論は『ポエジーの修辞学』*Rhétorique de la poésie* (1977) となって集大成される。ここで最終的に「意味内容」の部門では、ディスクールにあらわれる「特性」(propriété)というイゾトピーの性質上、「語」と「文」の単位を分離しても意味がなく、「isosémie」と

(20) Arrivé: *ibid.*, pp. 54 et 58.

(21) Groupe μ : 《Lecture du poème et isotopies multiples》in *Le français moderne 1974 N° 3*, Artrey, p. 220.

《isologie》は同一視されているし、また「表現」部門における《isotaxie》と《isoplasmie》は、シニフィアンの同一単位、及び同一統辞構造の規則的繰り返しとみなされ²²、複雑に見える彼らの分類も結局はアリヴェの二分法と大差はない。

むしろ重要なのは彼らが「多重イゾトピー」(poly-isotopie)を allotopie と結びつけて論じている点である。たとえば ABCDE という発話(énoncé)があり、CとEが共にABCに対しallotopesであるなら、イゾトピーはABC及びCEに働き全体はABC'DE'(ABD=i1; C'E'=i2)となりここに「二重イゾトピー」(bi-isotopie)が成立する。つまりディスクールが二重イゾトピーであるためにはallotopieが必要となるのである(《On définira donc un discours comme bi-isotope lorsqu'une de ses unités au moins est allotope par rapport à la première isotopie [...]》²³)。

「Allotopie=多重イゾトピー」という短絡化は、同一レベル内においてのみ言えることであるが、allotopie そのものは「詩的機能」を照射する有効な概念のように思われる。ただグループμの関心は「詩学的解読」(lecture poétique)理論の構築へと向っているため、《文学的》ディスクールそのものの性質についての言及はなされずに終わっている。

このように「イゾトピー」は様々に解されてきたが、「詩的テキストは多重イゾトピーである」という指摘だけでは、文学作品における多義性の問題としてすでに自明のことであって、それが「文学性」解明への前進だとはとうてい言えるものではない。しかしながらいくつかの問題点が浮上してきたのは事実であり、われわれは少なくともこれまでの概念を用いつつ「詩的機能」を考え直すことぐらいはできるであろう。

²² Groupe μ: *Rhétorique de la poésie*, Complexe-P.U.F., 1977, p. 35.

²³ Groupe μ: *ibid.*, p. 55.

3. イゾトピーと詩的機能

われわれは気紛れから「イゾトピー」をヤコブソンの「詩的機能」に照らし合わせるのではない。「詩的機能」は、まず「文学性」のひとつの定式化であるし、そして何よりもその「機能」はイゾトピーの成立過程を十全に《投影》していると思われるからである。もちろん「詩的機能」は「イゾトピー」以前に提出された概念であるが、「イゾトピー」側からそれを再検することで、この機能の持つ《詩的機能》がいくらか明らかになるはずである。

周知のとおり「詩的機能は等価の原理を選択軸から結合軸へ投影する」(《The poetic function projects the principle of equivalence from the axis of selection into the axis of combination.》²⁴⁾)。この選択軸の原理は、F.ソシュールの「連合関係」(rapport associatif)に相当し、そこでパラディグムを形成する語は必ず何らかの共通点を持っている。ソシュールがあげた例²⁵⁾によれば、《enseignement》は、1) その語幹を等しくする enseigner, enseignons, etc., 2) その接尾辞を等しくする armement, changement, etc., 3) シニフィエのアナロジーによって instruction, apprentissage, éducation, etc., 4) 単なる聴覚映像 (image acoustique) の共通性によって clément, justement, etc., という具合にいくつもの「連合関係」を持つ。この「共通性」こそ広義の「イゾトピー」であると考えられる。さらに結合の原理は「連辞関係」(rapport syntagmatique) であって統辞論レベルに関与するが、そもそもその結合を保証するのは「イゾトピー」であった。そうすれば「詩的機能」

24) Roman Jakobson: 《Linguistics and Poetics》[《L.P.》] in *Style in language* (Thomas A. Sebeok ed.), M.I.T. Press, 1960, 7th, print. 1978, p. 358.

25) Ferdinand de Saussure: *Cours de linguistique générale* (Tullio de Mauro éd. 1972), coll. "Payothèque", Payot, 1982, pp. 173-175.

とは徹頭徹尾「イゾトピー」の《préonasmе》なのである。

ところでグループμに従えば、「イゾトピー」は《非文学的》ディスクールのひとつの特徴であった。「詩的機能」が「イゾトピー」を説明したものであるならば、その機能は奇妙なことに《非文学》ディスクールの性質を解き明かしたことになる、なんら《詩的》(ヤコブソンが繰り返し力説したように、たとえそれが言語芸術の唯一の機能ではなく、詩の領域を超えるものであるにしても)なものを、ましてや「文学性」を定式化したことにはなっていない。このアポリアは、「詩的機能」が「メッセージ」に重きを置く(《The set (*Einstellung*) toward the MESSAGE as such, focus on the message for its own sake, is the POETIC function of language.》²⁶⁾)と規定されているだけで、具体的にメッセージの何に——音韻的表現なのか修辭的表現なのか、等——かかわるのが明示されていないことと、またわれわれが一語で片付けてしまった広義の「イゾトピー」が、先にその展開をみたどのイゾトピーに相当するのかが区別されていないこと、という二重のあいまいさに帰結する。解決への糸口は《等価》の原理に秘められている。

グレマス理論において isotopie classématique ([I.C]) は本来結合軸に働くものである。たとえば、《Je trouve Marie jolie.》(Ex. 1) では、支配的 [I.C] として / humain / が考えられるだろう。しかしそこにイゾトピーが見い出せるとしても、《trouve》をもとにして縦軸に Marie, jolie, je というパラディグムが連想できるとは思われない。各項は等価の原理をなんら反映していないのである。

次に (Ex. 1) を《Je trouve cette fleur jolie.》(Ex. 2) とするだけで全体を覆う [I.C] は消滅し、/ humain / と / plante / とに分断されることがわかる。しかし (Ex. 2) にはなんら《偏差》は感じられない。同様に《cette maison》を入れれば / humain / + / objet / , 《ce paon》

²⁶⁾ Jakobson: 《L.P.》, p. 356.

を入れると / humain / + / animal / となり常に二つの [I.C] が共存することが確認される。このことから isotopie complexe はなんら「文学性」の弁別特徴ではないのではないかという疑問が生じる。さらに Marie, fleur, maison, paon は, 《Je trouve [] jolie.》の [] 内に入ずれも入ることができるという点において等価であって, / joli(e) / という [I.C] をもとにパラディグムを作る。これは選択軸に働く [I.C] である。しかしそれを横軸に並べたとしても《文》は成立しない。

以上のことから [I.C] syntagmatique と [I.C] paradigmaticque を区別した方がよいことがわかる。グレマス理論の「イゾトピー」は [I.C.s] であり, それはパラディグムを構成しない。一方ヤコブソンの「詩的機能」の選択軸は [I.C.p] に相当するが, これはサンタグムを構成しない。従って [I.C] だけに限定すれば, 等価の原理は選択軸から結合軸へ《投影》されることはなく, 「詩的機能」は成立しないのである。

Noyau sémique に関するイゾトピー [I.N] は [I.C] と対象的である。ラスチエが分析した isotopie sémiologique はグレマスの figure nucléaire レベルでのイゾトピー ([I.N]) であった。その一部⁷⁾をあげてみよう。

マラルメの

SALUT

Rien, cette écume, vierge vers

A ne désigner que la coupe;

を, 彼は《écriture》に関する [I.N] として次のように読んでいる。

∥Salut∥	:	salvation
∥Rien∥	:	le texte (la littérature étant définie par la négativité)
∥écume∥	:	plume
∥vierge∥	:	idéal
∥vers∥	:	la littérature

7) Rastier: *op. cit.*, p.94.

∥ ne désigner ∥ : absence de référence

∥ coupe ∥ : encrier

ここで [I.N] は、ソシュールがあげたシニフィエのアナロジーによる連合関係ほどの強度は持たない（つまり共通する *sèmes* の数が少ない）としても、イゾトピーが *sémème* のポジティブな内容を表わす *Noyau sémique* に働いているが由に [I.C.s] の場合よりはパラディグムが連想し易くなっている。しかしそのパラディグムは厳密な意味において等価ではない。各項の品詞は様々で、先にみたような結合軸の一定の場所に無差別に置き換えることはできないからである。

一方そのサンタグムは《偏差》を感じさせ [I.C] の破壊を示している。それでもこの詩が読めるのは、サンタグムが [I.N] によって最低限保証されているからである。そしてこの [I.N] がパラディグムを構成するなら [I.N.p]=[I.N.s] となる。この場合、等価の原理に固執すれば「詩的機能」は成り立たないと言わざるを得ないが、パラディグムをなす各項は《等価》であると拡大解釈すれば、[I.N] は「詩的機能」を満たしていると言えるだろう。

アリヴェヤグループ μ の「内容」のイゾトピーは、これら [I.C] 及び [I.N] のいずれかに吸収されるものであって、ラスチエが《*isotopie sémantique*》と呼んだ *sémème* に働くイゾトピー（[I.Sé.]）ではない。[I. Sé.] を構成する要素はすべて等価であり、シニフィエのアナロジーによる連合と一致する。しかしその各項を横軸に並べたとしても《類義語》の羅列に終わるだけで、通常のディスクールは形成されないのである。

以上のことからわかるように、選択軸において等価である各項は、結合軸に移すことはできない。実際ヤコブソンがあげた《I like Ike.》は、なるほど「表現」レベルにおいてイゾトピーが働き [I.E]、音の類似からパラディグムを形成している。しかしその各項は、同一サンタグムの

一定の場所と置き換え可能という点からみれば等価ではない。従って《等価》の概念を修正し、パラディグムが形成されていればその各項は等価であると認めなければならないだろう。そうすれば、なんらかのイゾトピーによってパラディグムが作られ、それらがサンタグムを成す場合には、そこに「詩的機能」が働いていると言えることになる。もともとイゾトピーは横軸で認知されるものであるため、結局そのイゾトピーがパラディグムを構成するものであれば、すでに「詩的機能」は満されているのである。

同一音、あるいは同一音節などの項から成るパラディグムのサンタグムへの《投影》は理解し易く、「表現」のイゾトピー（《the horrible Harry》、《Veni, vidi, vici.》）に関してはさほど問題はない。一方「内容」のイゾトピーでは、パラディグムを作る強度は、[I.Sé.] > [I.N.] > [I.C.s] であるが、すでに見た理由により [I.Sé.] と [I.C.s] は排除されるので、[I.N.] だけがサンタグムと一致し「詩的機能」を満たすことになる。従ってわれわれはヤコブソンの定義を修正して次のように言うことができる。《詩的機能》は選択軸のイゾトピーを結合軸で再現する。その時「イゾトピー」は [I.E.] あるいは [I.N.] となっている、と。

☆ ☆ ☆

意味論に特有な《思い込み》と《稚拙さ》が本論のイゾトピーに違いない。幾つかの問いが、顧みられずに残されている。文学性への執着が、記号論と化して浮いている。こうした読みは、いつもおきまりの言葉を吐いて、身をかかわす。《[...] la littérature est une notion introuvable.》²⁸⁾ トートロジックな結末を求めて、文学性が舞い戻る。より遠くへ、常に先へ。

イゾトピー現象は《lecture poétique》として成果をあげている。それは文学性からの逃避ではなく、文学性の開拓なのである。たとえレトリックであるにせよ... (昭57卒、神戸大学博士課程)

²⁸⁾ Thomas Aron: *Littérature et littérature*, Annales littéraires de l'université de Besançon 292, Belles Lettres, 1984, p. 20.